

**どっちがよくとんだ？**  
**出雲市立中央幼稚園（島根県出雲市）**

子どもの言葉

教師の問いかけ

受けとめ 援助

子どもの様子

教師の受けとめと援助

この凧あがるかな？

4月14日

園庭で友達と鬼ごっこをしたり、うんていに挑戦する子どもたち。その中で A 児は買い物袋の持ち手を握りしめ、行ったり来たりしている。買い物袋は風を受けてふくらんでいた。

教師「A 君、なにしているの？」

A 児「風が強いから、凧があがるかな？と思って」と答え、再び走り始める。

凧よりこっちが面白いんじゃない スライダーを作ろう

4月20日

教師「袋じゃなくてもこれも飛ぶよ」「こんなふうに作ってみようか」と、教師が作ってきたペットボトルを使った飛ぶおもちゃを子どもに提案する。

袋凧で遊んでいた A 児が最初に反応し「アッ おもしろそう、作る作る」といって教師と一緒に作り始める。すると、他の子どもも作り始める。7～8人の仲間が集まったので、教師「このおもちゃの名前はなににする？」と問いかける。

しばらく考えて「スライダー」となる。

スライダーが出来上がると、みんなが一列に並んで一斉に北方向に投げる。「どうしたら遠くに飛ぶのかな？」と言いながら繰り返し投げている子もいる。

- ・ 後ろに反動をつけて飛ばそうとする B 児
- ・ 先端にビニールテープを巻き改良しては飛ばしている C 児など、それぞれ、自分なりに考えたことを試している



《ペットボトルスライダー》



どっちがよく飛んだかわからん

園庭でスライダーを飛ばす遊びが続いている。

みんなで並んで飛ばすと、誰が一番飛んだかわかるけど、1回目と2回目だとどちらがよく飛んだかわからん」とD児が言う。

朝の会の話し合いの時間に、この様子を学級全体に伝える。

D児が、「棒みたいなのに1・2・3って書いてあるのを使えば」と言う。翌日、メジャーを見せると、スライダーの遊びをしているグループが「貸してください」と言って、園庭に持って出て、測り始める。

5歳児として、この遊びが本当に面白いのかな？買い物袋の凧は2歳児がよくやっていた遊びなんだけど・・・と、この遊び方に疑問を持つ。

買い物袋を持って走るだけでなく、もっと工夫して遊んでほしい。

袋凧よりも工夫したり、試したり、友達と競い合ったりすることができる教材を提示してみる。

風の強さに気づいて遊び始めたから、風で遊ぶ姿は支えていこう。

作っては遊びを繰り返す中で工夫が生まれた。繰り返し遊びこむ経験が大切だと考える。

遠くに飛ばすために一人ひとりが自分なりに思考しつつ遊ぶ様子を見守る。

- ・ 投げ方を工夫する
  - ・ スライダーの重さを変える
  - ・ 羽や翼などをつけて形を変える
  - ・ 投げる向きを変える
- など、一人一人が自分なりに思考しつつ遊ぶ様子が見られた。

\* ゴム動力で飛ばす素材を提示しようと考えたが、子どもたちが工夫しつつ飛ばしている姿を見て、教師も子どもたちから出た風の遊びを深めていこうと見通しを見直してメジャーを提案する。飛ぶ距離をメジャーで測ることによって、数字でわかる方法を知り、目で見てすぐわかるようになった。飛距離を伸ばすという自分のめあてに向かって子どもたちの意欲が高まった。



特別の支援を必要とするE児の様子から  
(肢体不自由があり、移動は主に装具をつけて、歩行器で歩くことが多い。)

クラスの集まりの中でスライダの遊びが話題となり教師と友達の話を聞く中で、次第にスライダの遊びに関心をもつようになってきた。担当教師が「Eさんもお庭で飛ばしてみようか？」と誘うと「うん」とはりきって出かけた。シートの上に座って全力で腕を振り上げながら投げる。E児は「何メートルとんだ？」とメジャーの0の目盛りを持って待つ。友達がメジャーを持ってスライダまで走る「1メートル10センチ」と読んでいる。2回目以降は「投げたよ！早く測って」と友達にも大きな声で呼びかけるようになり、自分の記録を楽しみにするようになった。

また「Eちゃん、いい？」と、友達に言われると「いいよ」と、大きな声で答えてメジャー係を楽しんでいた。

4月22日

おうちでつくってきたよ

スライダをとばす毎日。

「みて！これお兄ちゃんに作ってもらった」

「これも飛ばしてみる」と紙飛行機を手にして張り切って登園してきたA児。すぐに外に出てスライダの記録をとっている友達のそばで紙飛行機を飛ばし始める。

朝の集まりでA児のことをみんなに伝える。

A児「スライダよりよく飛んだよ」と得意顔で話す。

スライダで遊んでいる子ども達が「ぼくもつくりたい」と反応し、紙飛行機に向かって雰囲気盛り上がる。

4月23日

「お家で作ってきたよ」

「紙飛行機を作るので、紙をください」

次から次へと紙飛行機を折って試して飛ばし、飛ぶとすぐに外に出て競争するようになった。

スライダ飛ばしで、羽根をつけてかたちを工夫していたF児が紙飛行機を作りながら

「紙を折っただけなのになんで飛ぶ？紙だと飛ばん？」と教師に問いかけた。

「なんでかな？」と、とりあえず教師は答えた。

家庭でもいろいろな作り方を教えてもらったり、調べたりして夢中になって遊ぶ姿が見られた。

メジャーを伸ばす方向に気がついたり、スライダの動きに目をとめたり、遊びながら、経験しながら無意識に距離と他の要素とのかかわりを体得しているものと思われる。

自分から風につながった遊びを見つけてきたA児の気付きを受け止めてクラス全体に紹介する。

いろいろな飛行機に自ら気づけるように様々な紙飛行機の折り方の載った本を保育室に置いておく。

風で飛ぶおもちゃ、風の遊びという共通のものを見つけて比較したりするようになった。

様々な本や資料から飛行機の飛び仕組み、浮き上がる力など大人である教師すら知らなかったことばかりで、そのことを必死で調べている子どもたちの姿に感心するばかりである。「飛行機はなぜ飛ぶか」この不思議がこれからの意欲につながっていくと考える。

## みどころ

風を感じて戸外での遊びを楽しむ子どもの姿に、「5歳児として、この遊びが本当に面白いのかな？ 買い物袋の凧は2歳児がよくやっていた遊びなんだけど・・・」と、この遊び方に疑問を持った保育者は、新たに教材を提示しました。子どもの発想を大事にしながらも、幼児には気付けぬ提案や刺激をすることで、子どもたちの経験する内容が大きく変わっていきました。実態にあった教材なので、作り方や遊び方の工夫が引き出されています。

また、「どっちが飛んだか分からない」という問題を話し合う中で「測る」ということに気付き、遊びに取り入れることができました。さらに、家庭で「飛ばす」ことを楽しめた紙飛行機を幼稚園でも楽しもうとした友達の発想や「スライダより飛んだ」という気付きが遊びの展開となり「紙を折っただけなのになんで飛ぶ？紙だと飛ばん？」と、疑問をもって意欲的に遊ぶ姿につながっています。